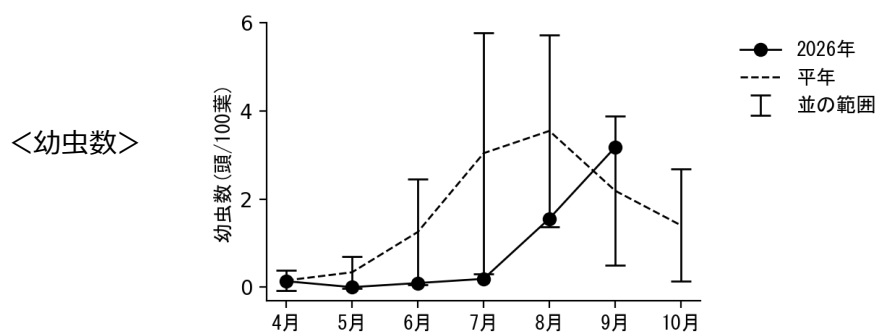
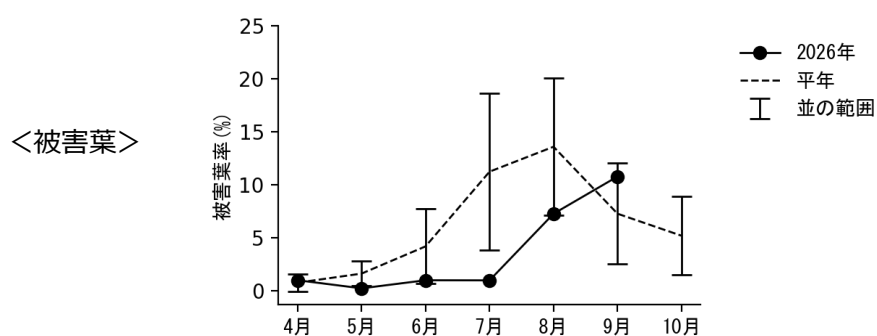


作物	カンショ		地域	沖縄群島
病害虫名	① イモキバガ（イモコガ）			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予 報	9 月からの増減傾向	↘		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↘）		

調査結果

今期と平年の発生推移



・発生ほ場率100%（平年：84.8%）

防除のポイント

・老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢期の防除が重要である。

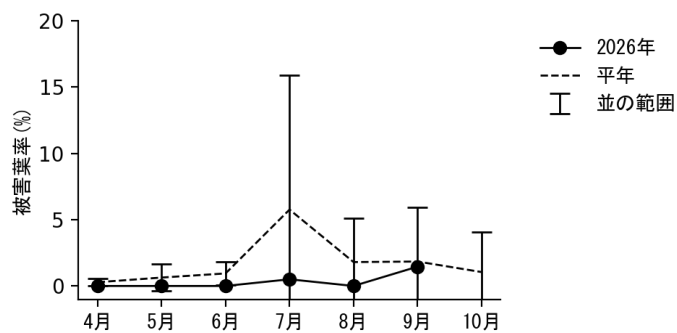


作物	カンショ		地域	沖縄群島
病害虫名	② ナカジロシタバ			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予報	9 月からの増減傾向	→		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（→）		

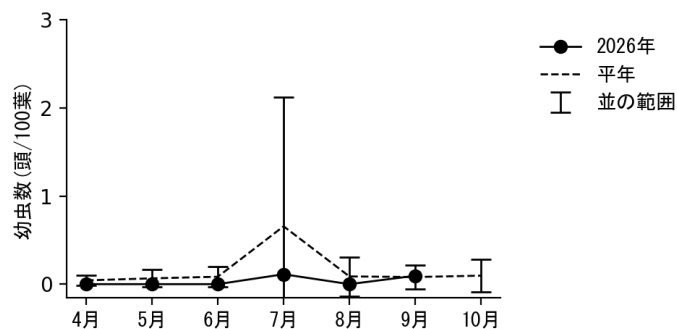
調査結果

今期と平年の発生推移

<被害葉>



<幼虫数>



・発生ほ場率12.5%（平年：30.4%）

防除のポイント

・老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢期の防除が重要である。

作物	カンショ	地域	沖縄群島
病害虫名	③ エビガラスズメ		
調査結果	9 月の発生量（平年比）	やや多	
予報	9 月からの増減傾向	→	
	10 月の発生量（平年比）	やや多	

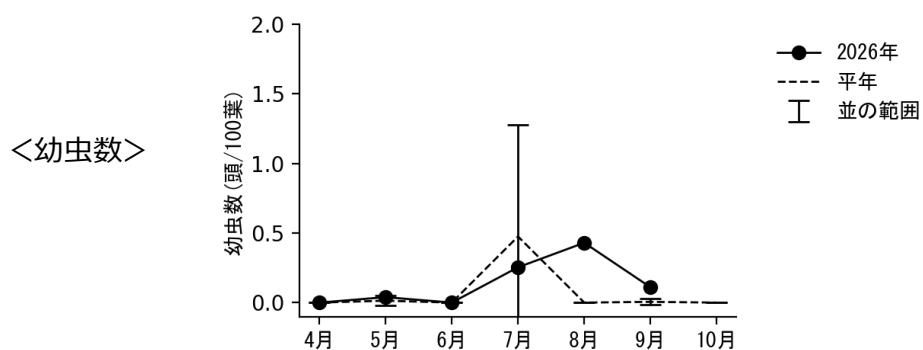
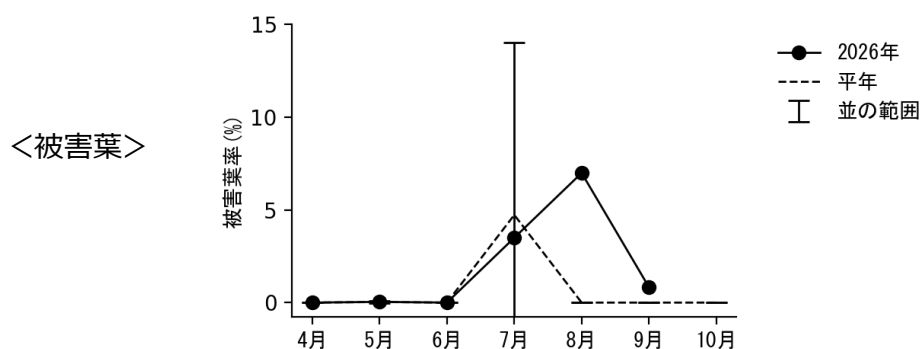


予報の根拠

平年の発生量の推移 (→)

調査結果

今期と平年の発生推移



・発生ほ場率12.5%（平年：0%）

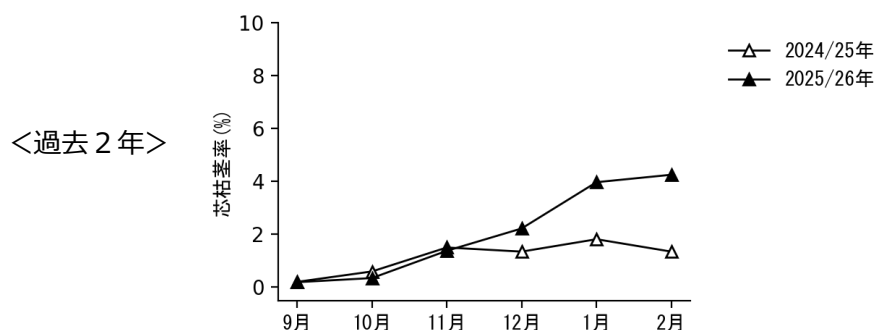
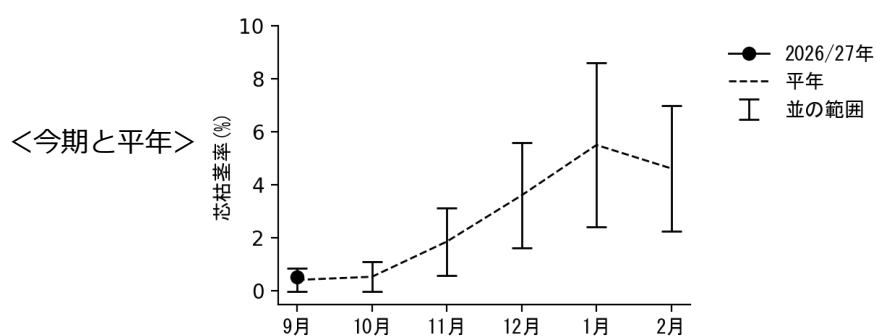
防除のポイント

- ・若齢幼虫の早期発見に努め、薬剤防除を行う。

作物	さとうきび		地域	沖縄群島
病害虫名	① メイチュウ類（カンシャシクイハマキ・イネヨトウ）			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予 報	9 月からの増減傾向	→		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（→）		

調査結果

芯枯茎率の推移（夏植え）



・発生ほ場率25.0%（平年：32.3%）

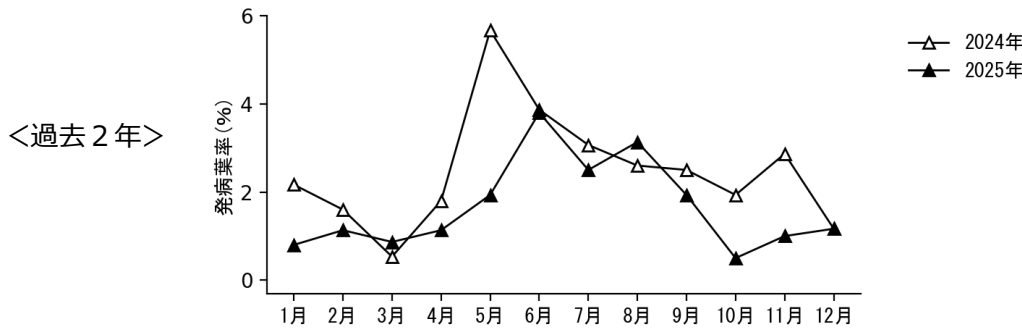
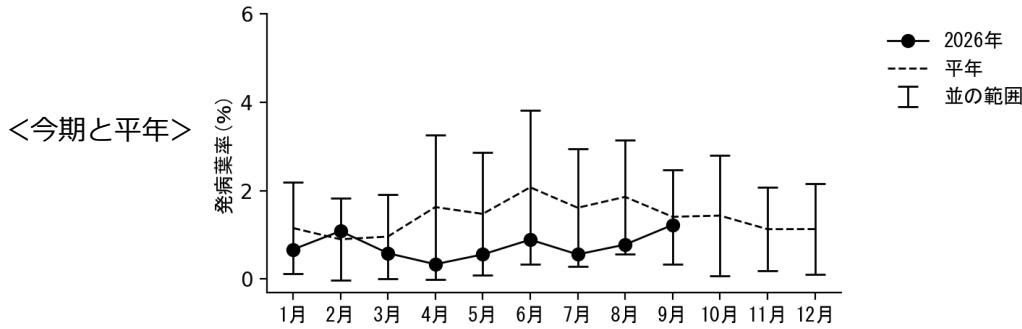
防除のポイント

- ・ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- ・茎葉への乳剤等の散布は、葉鞘と茎のすき間に十分な薬液が入るように丁寧に行う。

作物	かんきつ（温州みかん）		地域	沖縄群島
病害虫名	① そうか病			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予報	9 月からの増減傾向	→		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（→）		

調査結果

発病葉率の推移



- ・ 葉の発病度0.2（平年0.4）
- ・ 発生ほ場率100%（平年：58.0%）

防除のポイント

- ・ 罹病葉・枝は伝染源になるので除去する。

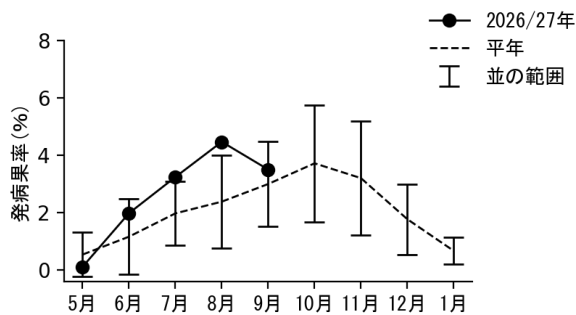
被害果→



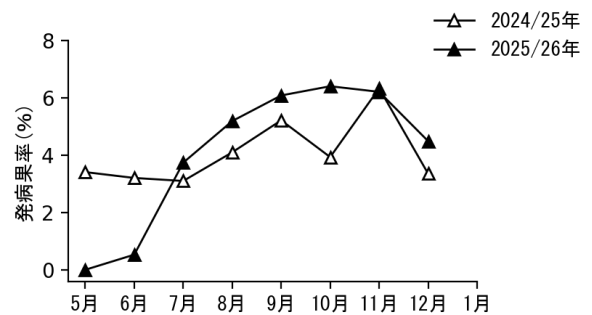
作物	かんきつ（タンカン）		地域	沖縄群島
病害虫名	① かいよう病			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予 報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）		

調査結果

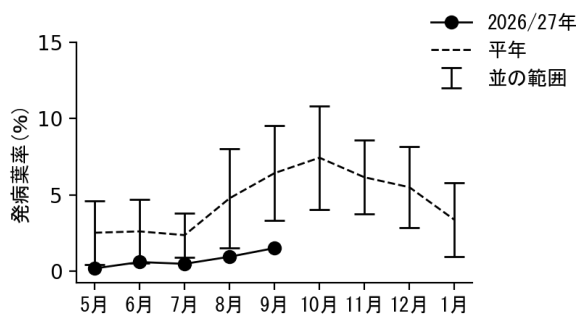
発病果率の推移（今期と平年）



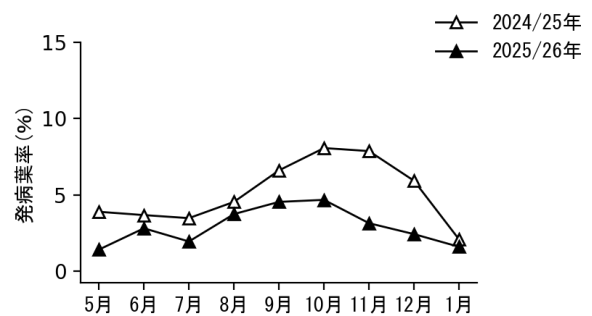
発病果率の推移（過去2年）



発病葉率の推移（今期と平年）



発病葉率の推移（過去2年）



- ・ 果実の発病度0.7（平年0.6）
- ・ 発生ほ場率100%（平年：82.4%）

防除のポイント

- ・ 本病はミカンハモグリガによる食害痕から発生しやすく、翌年の伝染源になるので、ミカンハモグリガ被害葉の除去に努め、被害が目立つ場合は薬剤による防除を行う。
- ・ 罹病枝などの病斑が伝染源となり、台風による葉や枝の傷口（風傷）は感染を助長することから、台風前後ともに薬剤防除を行う。

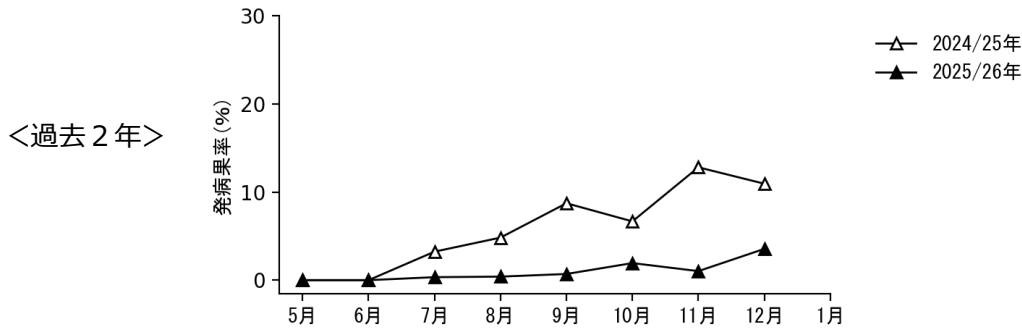
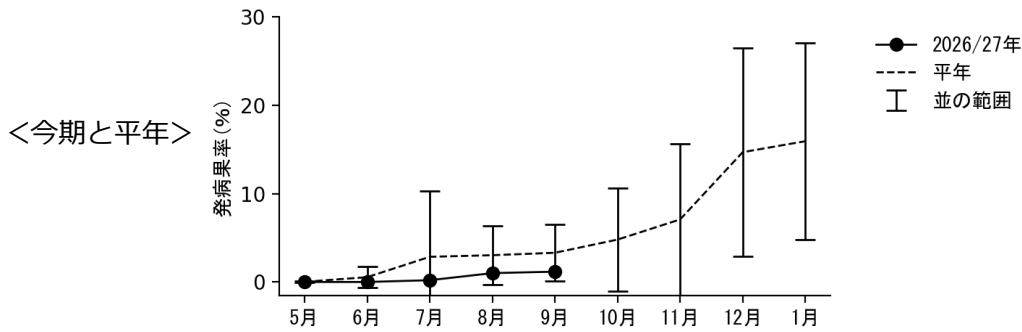
被害葉→



作物	かんきつ（タンカン）		地域	沖縄群島
病害虫名	② 黒点病			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）		

調査結果

発病果率の推移



- ・ 果実の発病度0.2（平年0.7）
- ・ 発生ほ場率50.0%（平年：66.7%）

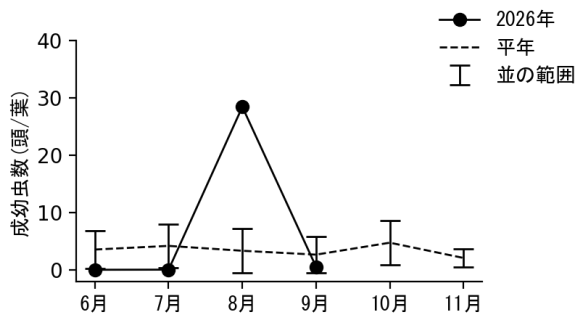
防除のポイント

- ・ 罹病葉・枝は伝染源になるので除去する。

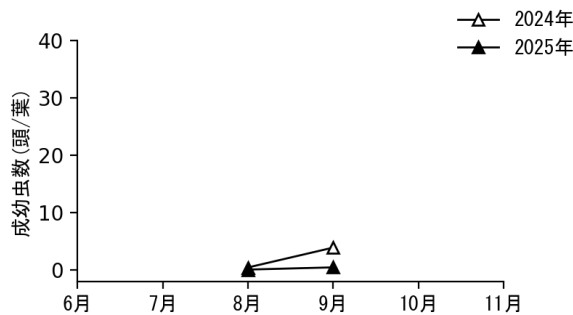
作物	マンゴー		地域	沖縄群島
病害虫名	① チャノキイロアザミウマ			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予 報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）		

調査結果

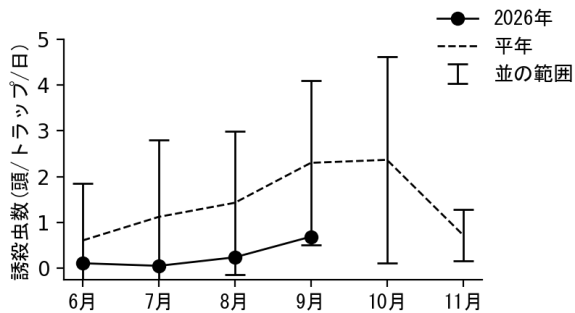
葉当たり成幼虫数の推移（今期と平年）



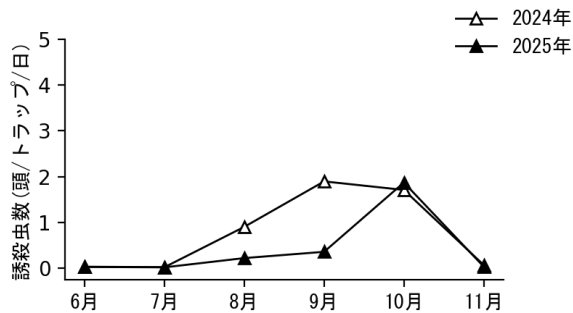
葉当たり成幼虫数の推移（過去2年）



トラップ当たり誘殺虫数の推移（今期と平年）



トラップ当たり誘殺虫数の推移（過去2年）



・発生施設率37.5%（平年：88.5%）

防除のポイント

- ・ 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
- ・ コミカンソウ類など、発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- ・ 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

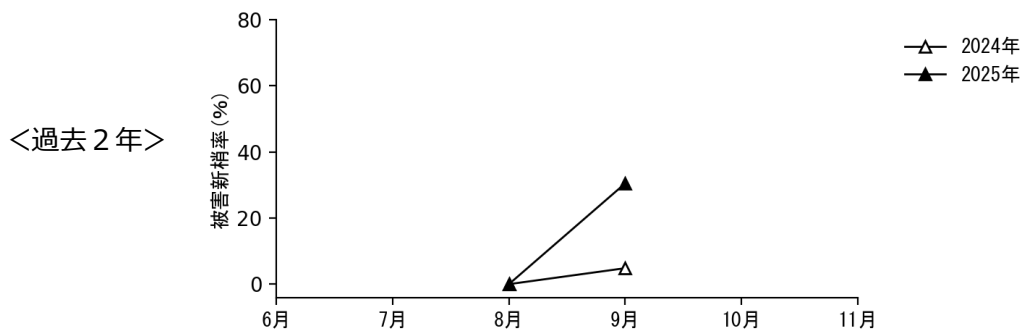
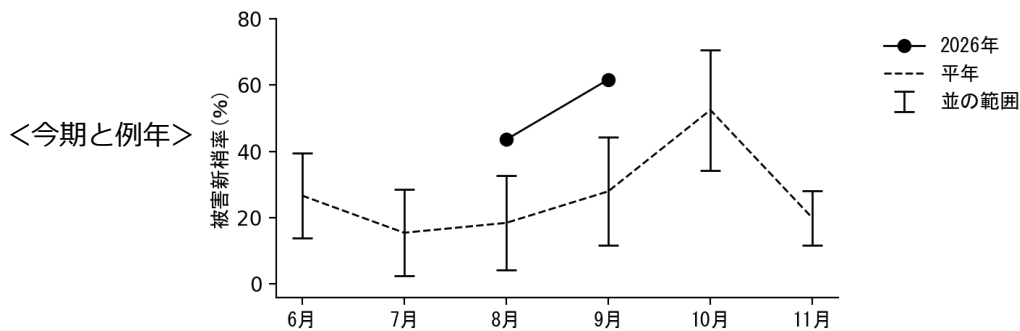


ナガエコミカンソウ

作物	マンゴー		地域	沖縄群島
病害虫名	② マンゴーハフクレタマバエ			
調査結果	9 月の発生量（例年比）	やや多		
予報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（例年比）	やや多		
予報の根拠		例年の発生量の推移（↗）		

調査結果

寄生新梢率の推移



・発生施設率87.5%（平年：80.0%）

防除のポイント

・産卵から羽化まで約2週間と繁殖スピードが速いことから、新葉をよく観察し、早期発見・防除に努める。また高密度に寄生された葉は落葉が早く、幼虫の脱出痕から炭疽病等にも感染しやすくなることから、被害葉及び不要な新梢を除去し、施設外に持ち出し処分する。

・高湿度条件で幼虫や蛹の生存率が高まることが知られているため、施設内の湿度管理に留意する。



幼虫



新葉の虫こぶ

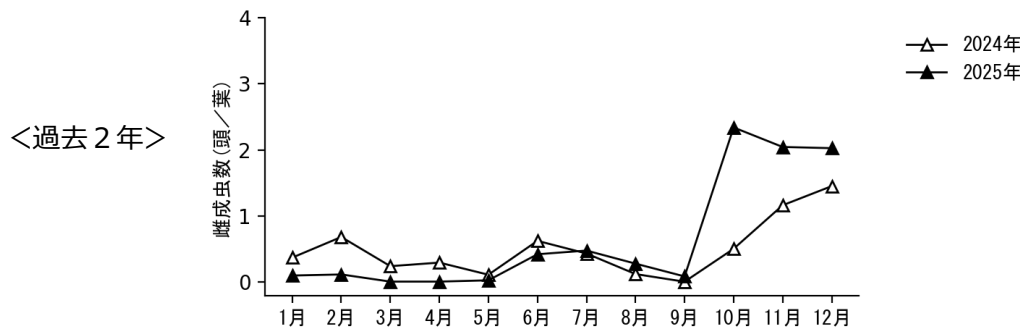
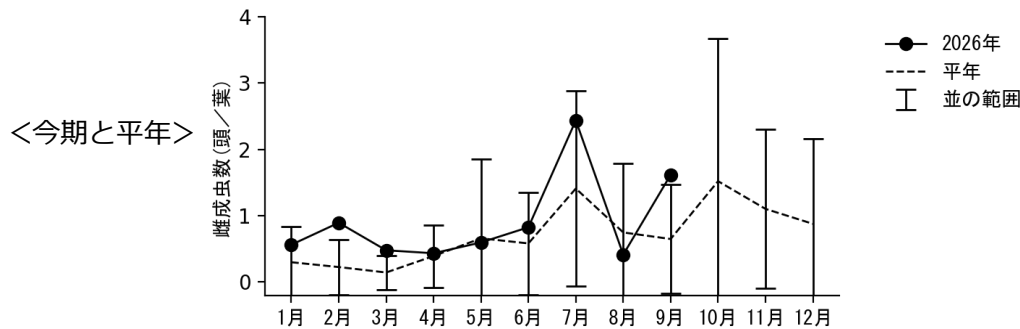


被害葉

作物	マンゴー		地域	沖縄群島
病害虫名	③ ハダニ類			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	やや多		
予報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）		

調査結果

雌成虫数の推移



- ・発生種：シュレイツメハダニ,マンゴーツメハダニ
- ・発生施設率37.5%（平年：54.2%） ※一部施設で多発

防除のポイント

- ・多発すると防除が困難となる。特に収穫時、発生が多くみられた施設では、多発する傾向があるため早期発見・防除に努める。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。



ハダニの寄生による葉のかすれ症状

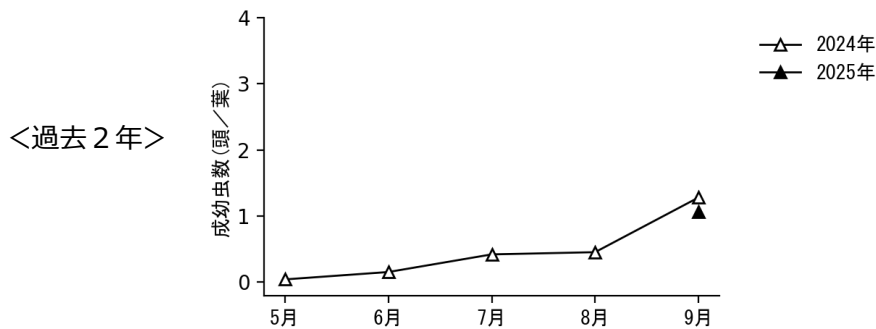
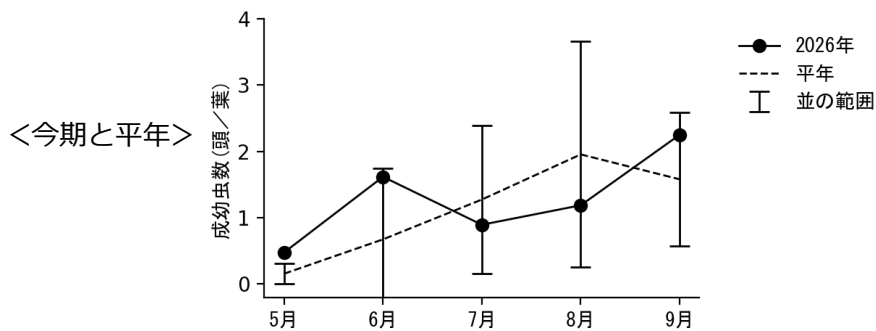


マンゴーツメハダニ

作物	オクラ		地域	沖縄群島
病害虫名	フタテンミドリヒメヨコバイ			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予報	9 月からの増減傾向	—		
	10 月の発生量（平年比）	—		
予報の根拠				

調査結果

成幼虫数の推移

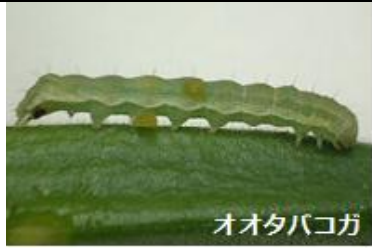


・発生ほ場率75.0%（平年：86.4%）

防除のポイント

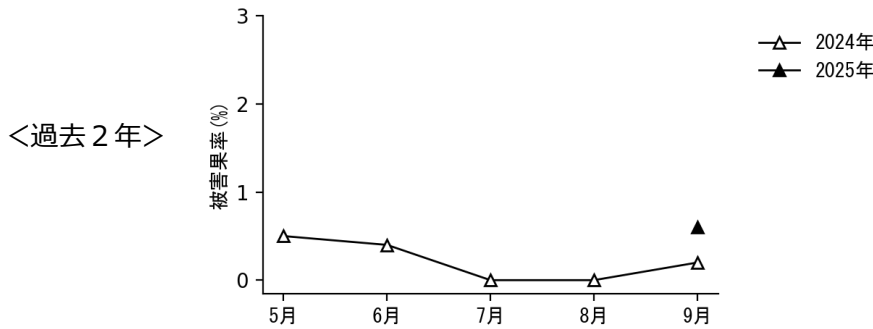
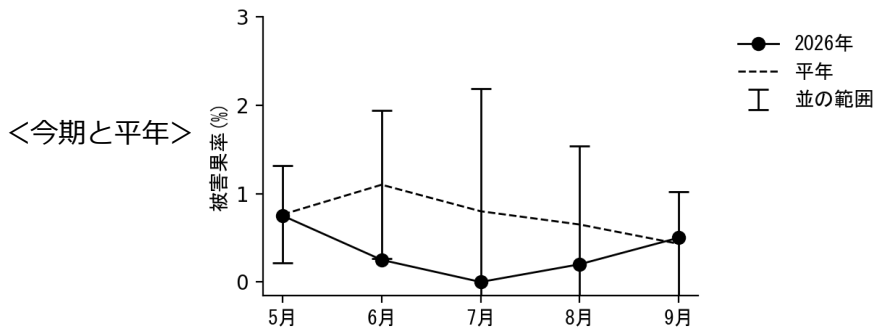
・多発すると被害葉は黄変萎縮するので、葉裏を観察し、早期発見・防除に努める。



作物	オクラ		地域	沖縄群島
病害虫名	チョウ目幼虫			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予報	9 月からの増減傾向	—		
	10 月の発生量（平年比）	—		
予報の根拠				

調査結果

幼虫数の推移



・発生ほ場率25.0%（平年：20.5%）

防除のポイント

- ・発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。
- ・食害痕を発見したら、速やかに薬剤を散布する。



クサオビリンガ



ハスモンヨトウ



ワタノメイガ



ワタアカキリバ



タイワンキドクガ

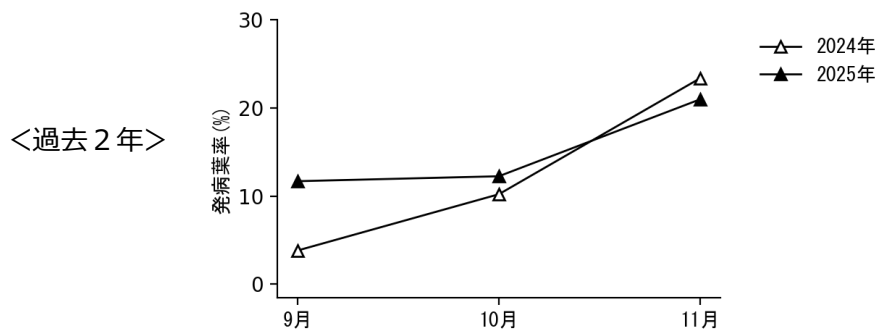
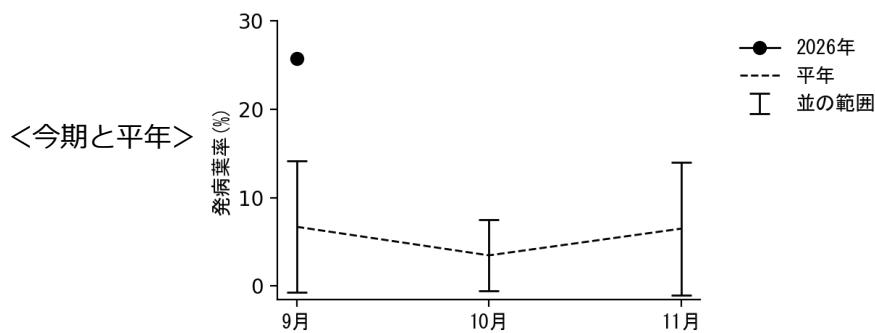


フタガリコガ

作物	小ギク（年末出荷用）		地域	沖縄群島
病害虫名	① 黒斑・褐斑病			
調査結果	9 月の発生量（平年比）	多		
予 報	9 月からの増減傾向	↘		
	10 月の発生量（平年比）	多		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↘）		

調査結果

発病葉率の推移



・発生ほ場率100%（平年：58.1%）

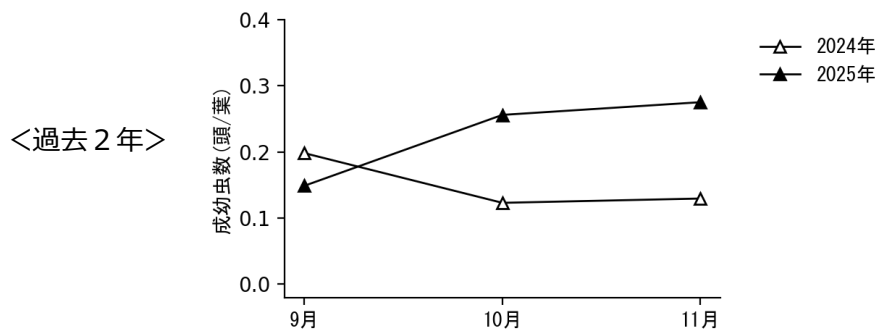
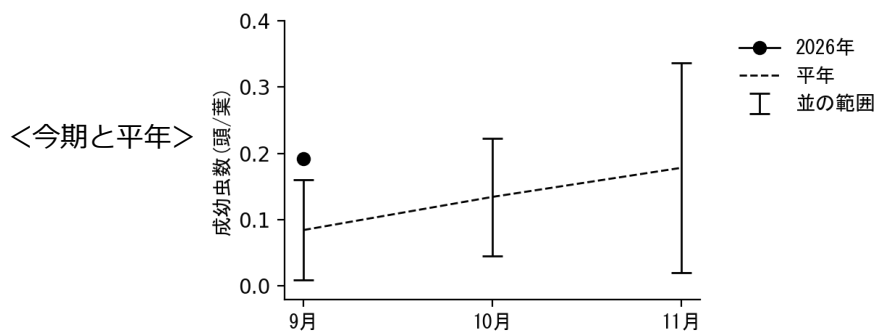
防除のポイント

- ・発病葉は速やかに除去する。
- ・ほ場の排水・通風を良くする。
- ・水滴の跳ね上がりを防止するため、敷草やマルチ等を行う。
- ・肥料切れや窒素質肥料の過用は発生を助長するため、施肥管理を適正に行う。
- ・発生が多い場合は薬剤防除を徹底する。

作物	小ギク（年末出荷用）		地域	沖縄群島
病害虫名	② アザミウマ類		 クロゲハナアザミウマ	
調査結果	9 月の発生量（平年比）	やや多		
予報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（平年比）	やや多		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）		

調査結果

成幼虫数の推移



- ・発生種：クロゲハナアザミウマ
- ・発生ほ場率83.3%（平年：81.0%）

防除のポイント

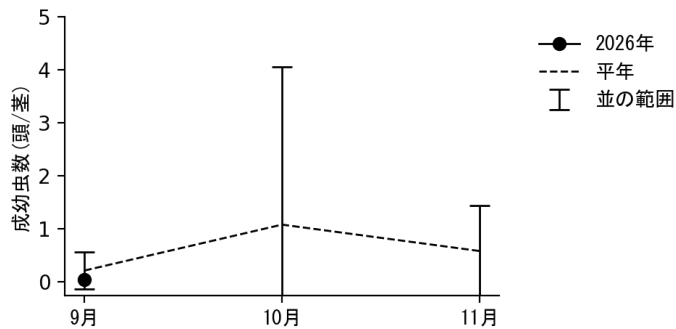
- ・苗床での防除を徹底し、本畑への持ち込みを防止する。
- ・定植～生育期または本虫の発生初期に粒剤を施用する。
- ・成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
- ・同一ほ場内にあるキクは、生長段階等の違いがあっても、同時に防除を行う。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいため、同一薬剤の連用を避ける。

作物	小ギク（年末出荷用）		地域	沖縄群島
病害虫名	③ アブラムシ類		 有翅虫	
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）		

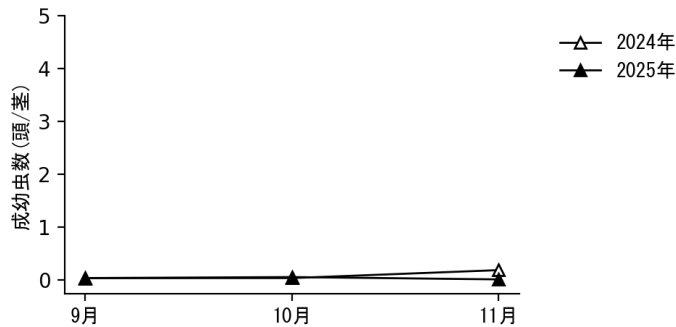
調査結果

成幼虫数の推移

<今期と平年>



<過去2年>



- ・発生種：ワタアブラムシ
- ・発生ほ場率66.7%（平年：33.8%）

防除のポイント

- ・発生源となりうるほ場内外の雑草を除去する。
- ・定植～生育期または本虫の発生初期に粒剤を施用する。
- ・発生が認められたら新葉部を中心に発生部位に薬剤散布を行う。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいため、同一薬剤の連用を避ける。

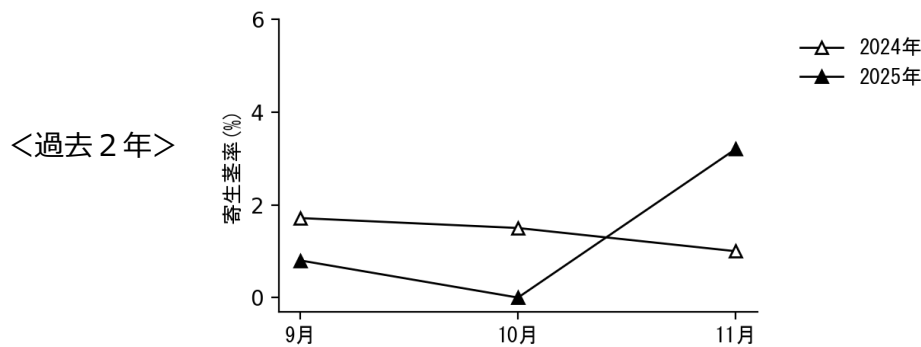
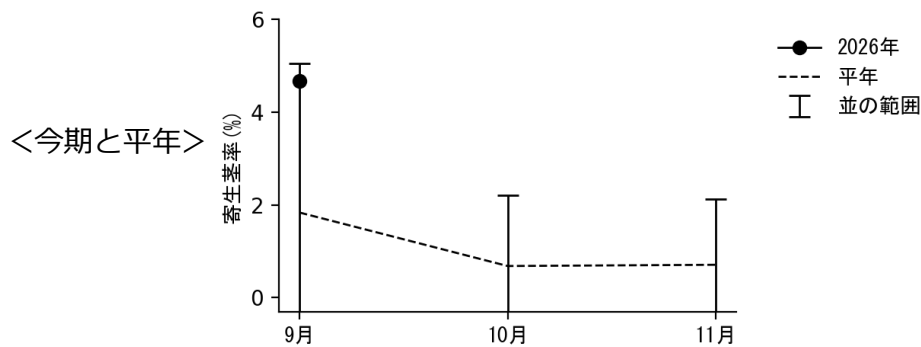


寄生の様子

作物	小ギク（年末出荷用）	地域	沖縄群島
病害虫名	④ チョウ目幼虫	 ハスモンヨトウ	
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並	
予報	9 月からの増減傾向	↘	
	10 月の発生量（平年比）	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移（↓）	

調査結果

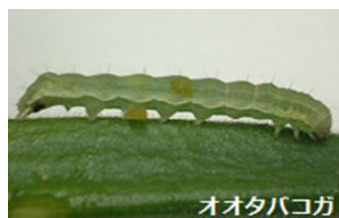
寄生茎率の推移



・発生ほ場率16.7%（平年：15.3%） ※一部ほ場で発生

防除のポイント

- ・発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。
- ・新しい食痕や虫糞を見つけたら近くに幼虫がいないか調べ、捕殺または薬剤散布を行う。



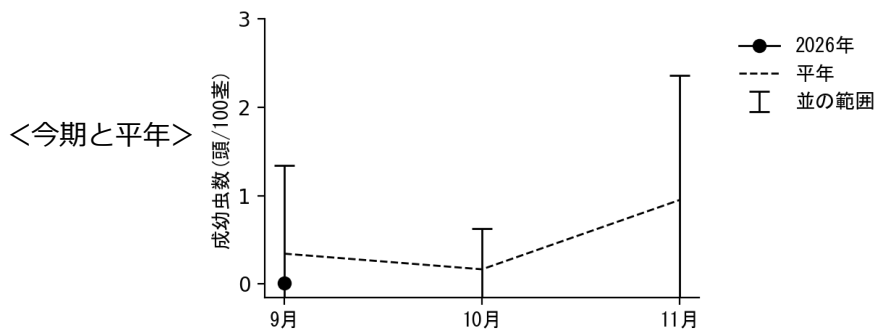
作物	小ギク（年末出荷用）	地域	沖縄群島
病害虫名	⑤ カスミカメ類		
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並	
予報	9 月からの増減傾向	↘	
	10 月の発生量（平年比）	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移（↓）	



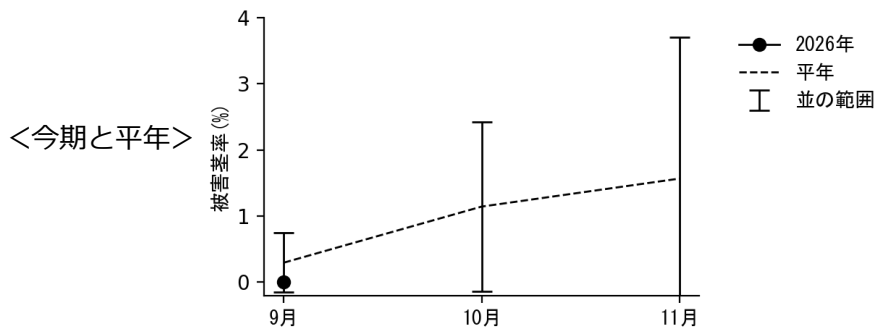
ウスモンミドリカスミカメ

調査結果

成幼虫数の推移



被害茎率の推移



- ・発生種：ウスモンミドリカスミカメ
- ・発生ほ場率16.7%（平年：10.8%）

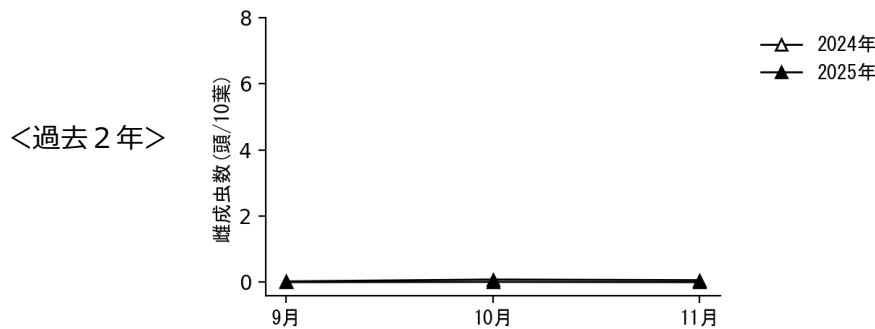
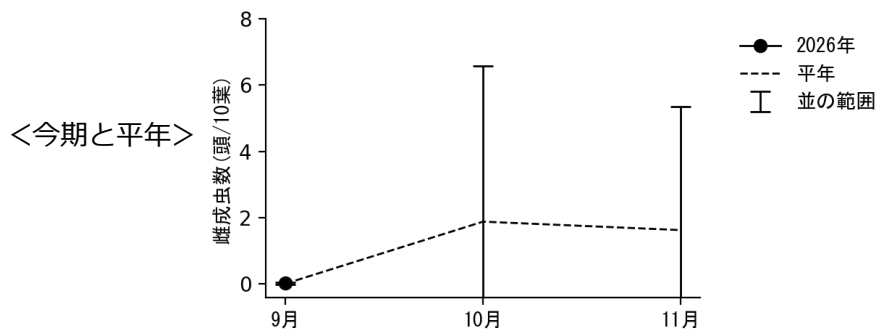
防除のポイント

- ・ほ場周辺のキク科雑草の花等は発生源となりうるので除去する。
- ・被害株は異常分枝するため、被害が確認された場合は速やかに再整枝を行う。
- ・防除は成虫の出現初期から5～7日おきに実施する。

作物	小ギク（年末出荷用）		地域	沖縄群島
病害虫名	⑥ ハダニ類			ナミハダニ
調査結果	9 月の発生量（平年比）	並		
予報	9 月からの増減傾向	↗		
	10 月の発生量（平年比）	並		
予報の根拠		平年の発生量の推移（↗）		

調査結果

雌成虫数の推移



- ・発生種：ナミハダニ（黄緑型）
- ・発生ほ場率33.3%（平年：5.4%）

防除のポイント

- ・葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布する。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。